

## トルコ・豪州で金融政策発表 変化なし見込みも、今後へのヒントは

2018年6月4日(月)

米金利の上昇を受けた新興国通貨からの資金流出の動きを受けて、新興各国は利上げを含めたいろいろな対応を余儀なくされています。

このところの主な動きをみると、

アルゼンチン中銀が4月27日に3%、5月3日に3%、とどめに4日に6.75%と8日間で3度の利上げを実施し、政策金利を40%に。

ブラジル中銀は16日の会合で、ほぼ確実と見られていた13回連続の利下げに踏み切らず2016年10月からの利下げサイクルを打ち止めました。

アジアでもインドネシア中銀が17日の0.25%利上げに続いて

30日の臨時会合で0.25%の利上げを発表。異例となる2週間で2回目の利上げに踏み切りました。

通貨安が進んだトルコ中銀も、それまでエルドアン大統領の低金利指示姿勢の下で利上げに消極的だった姿勢がうそのように積極姿勢に転じました。

4月25日の会合で、後期流動性貸出金利を0.75%引き上げ12.75%から13.50%へ。しかし、リラ安の動きがまるで止まらず、23日に後期流動性貸出金利を一気に16.5%へ。

これでリラ安は一服も、動きが一段落すると再びリラ売りの動きが出てくると見るや前回の利上げからわずか5日後の28日に

2017年に使用をやめていた本来の主要政策金利である

1週間レポ金利を主要政策金利として復活させることを表明し

その水準を従来の8%から、後期流動性貸出金利となっていた16.5%に

倍以上も一気に引き上げ。

翌日物貸出金利と同借入金利を上下1.5%に設定する

従来のコリドー型の政策金利を再開しました。

(公的にはレポ金利取りやめで機能していなかっただけで

コリドー型を廃止していたわけではありませんが)。

それまでの後期流動性貸出金利は、

従来の緊急避難金利としての役割に戻し、

金利水準を19.5%に引き上げています。

こうした中、今週はトルコ中銀の従来の金融政策会合が7日に予定されています。

レポ金利の再開が1日から、

準備もあって後期流動性貸出金利の19.5%へのシフトは7日から始まるという状況で

さらに利上げというわけにはいかないと考えられますが、

このところの積極姿勢について

トルコ中銀がどのような声明を出してくるのかには要注目。

また、今週4日16時にはトルコの消費者物価指数(5月)が発表されます。

消費者物価指数前年比の予想は+12.08%と

前回の10.85%から大きく上昇。

インフレターゲットである5.0%がかなり遠いという印象です。

予想を超えたとしてもさすがに利上げはないと思われそうですが

今後の追加利上げを示唆するような姿勢が見られると

トルコリラ買いにつながる可能性も。

なお、新興国ではありませんが、こちらも従来は

高金利通貨として名をはせた豪ドル。

豪中銀政策金利発表が5日に控えています。

現在の豪ドルの政策金利(オフィシャルキャシュターゲット)は1.50%。

米ドルにすでに抜かれた状況です。

2016年8月から続く現行水準を、当面の間維持すると表明しており

波乱要素はかなり少なくなっています。

(今回据え置くと20回連続の据え置きとなります)。

注目は声明内容で、

前回見られたインフレ率が当面低い水準で推移し、

18年に2%を若干上回るというこれまでの見通しを踏襲してくるのが注目。

経済成長について、今年来年と3%を若干上回るという見通しに変化があるか、

最近下がっているとされた豪ドルの水準について、

前回の会合(5月1日)からほぼ同水準での推移が続いたことを

どのように評価するのかなどがポイントとなりそうです。